

ミッドタウンのリバーサイドという、絶好の立地にあるこのアパートメント。南側の窓からエンパイアステートビル、西側窓からハドソン川が間近に眺められる。



玄関からリビングルームを見る。壁面のシルバー色は、アルミニウム塗装で、気に入りの光沢を得るまで3回塗り直しているとか。



TOWER in MIDTOWN

「ナチュラ志向にはもう飽きた。新世紀のインテリアはこれだ」とばかりに思いきったモノクロームの室内空間をつくり上げたのはインテリア・デザイナーのベンジャミン・ノリエガ・オルリツさん。室内の基調になっているのはアルミニウム塗装によるシルバー色。見事に生活感を消したインテリアです。

この部屋は、ハドソン川に近い44階建の高層マンションの最上階にあります。ふつうなら窓の外に目を奪われそうな絶景が広がっていますが、ベンジャミンさんは室内の個性が勝っていて、景色はこの部屋を引き立てる役割しかしていません。

それにしても不思議な部屋です。SF映画の「スタートレック」を意識したという未来的な部屋なのに、どこか懐かしい気分を呼び覚まします。よく見ると室内に広がるのは昔なつかしい敷きつめカーペット。これがいままた新鮮なのです。また



リビングルーム全景。クールな色調に曲線のある家具を配して、独特の雰囲気を作り上げている。置いてあるものひとつひとつに払われた神経の細やかさに、脱帽！壁面に大きな鏡がはめこまれ、部屋面積を倍に見せている。

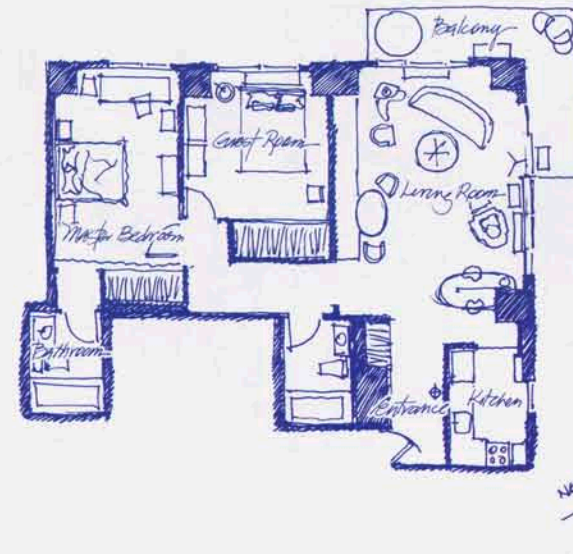
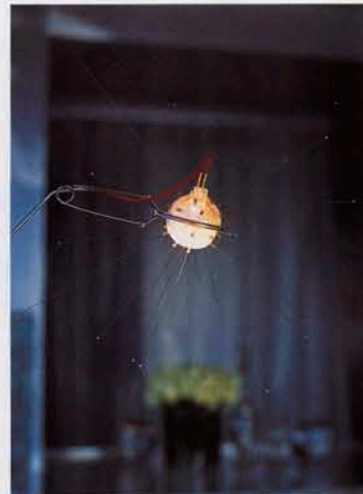


70年代風の椅子にアクリル板を置いただけのミニ「デスク」に座るベンジャミンさん。後ろは、仕事仲間のスティーブさん。彼はこの日、花を飾ったりモノの配置を考えたり、スタイリストのような役割をしてくれた。

室内に置かれたプラスチックの一体成型の椅子や、光を反射するのれんのようなスクリーンも、70年代に一世を風靡したインテリア・アイテム。見る者の遠い記憶を呼び覚まします。



(右)室内の軽やかさを演出するのはこんな小物たち。「モスキート」と名付けられたインゴ・マウラー作の照明器具。(上)宇宙人のような人形はスティーブさんの手作り。テーブルの曲線によく似合う。



気鋭のデザイナーが
提唱する
21世紀の
インテリアスタイル



照明器具作りの名手、ステイブンの作品。



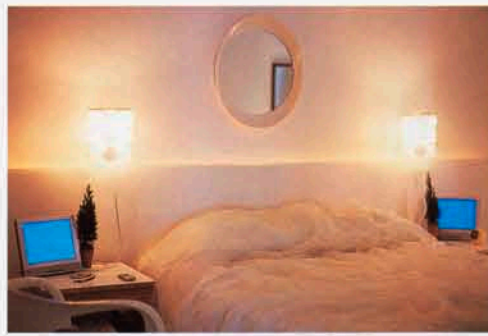
リビングのテーブル上に東洋への憧れが顔をのぞかせている。



水は、大きな器に入れてこんな飾り方もある。

TOWER in MIDTOWN

ベンジャミンさんの部屋には、じつに多くの透明のものがあることにお気づきでしょうか。テーブルトップやガラス器のもつ透明な美しさが、この部屋の浮遊するような独特のムードをつくり上げています。透明なテーブルトップには、部屋を広く見せる効果もあり、狭い住宅ではお勧めだとベンジャミンさんは言います。キッチンにあったのは、奥行き15cmほどのアクリル板の棚。見やすさが取りだしやすさにつながる、「見せる収納」の新テクニックです。「水もこの家の大事なインテリア要素です。フォルムのきれいなガラス器に封じ込めたり、水盤に水を張って反射を楽しんだり、水自体をディスプレイしています」とベンジャミンさん。光の屈折率を利用した水のディ



狭さを感じさせないように、ヘッドボードは寝室いっぱいの長さ。

スプレイは、室内の景色に潤いをもたらすし、気分を静める心理効果もあるのです。ベンジャミンさんは「クリーンなものが好き」と言います。その意味は、「余計なものをそぎ落とした美しさ」という、精神的なもののようなのです。たとえば、水、竹林、龍安寺の石庭。たいへんに東洋的で驚かされますが、これまでにない未来的なインテリアをつくっていくには、そういうものはかなもの思いをはせることが何よりの発想源なのでしょう。



窓の周りにアクリルの棚を作って収納力を高めた。透明な棚板なら、並べたものがきれいに見え、低い位置の鍋棚も取りだしやすい。



(上) 寝室の窓際にあるデスクコーナー。

(下) 客用寝室のチェスト上。ここにもフラットテレビがあった。



3cm厚のアクリルでできたカウンターに、水の容器などの好きなものを並べて。反射したり透過したりする光の変化を楽しむ室内だ。いつもは花を飾らないが、この日は「こんにちば」読者のためにと、この通り。

今月の特集、いかがでしたか。ご感想をお寄せください。

インテリア感覚の高いニュー Yorker。その注目を集める建築家とデザイナーのご自宅は、光の使い方が新しい、21世紀を意識した一種の実験住宅でした。あなたはどの住まいをどうご覧になりましたか。巻末ハガキ「こんにちば編集室行」をご利用になって、ぜひご感想をお寄せください。